

合意形成のための 社会編集

今田高俊 東京工業大学名誉教授・統計数理研究所客員教授

◆ 多様化する価値観、個性化する生活様式

価値観の多様化、生活様式の個性化が叫ばれて久しい。かつては、欠乏状態を克服して、豊かな社会をめざすことに国民的合意があった。しかし、およそこの30年来、日本国民の意識は「物の豊かさ」から「心の豊かさ」へと大きく転換した。平成バブル経済とその崩壊による失われた20年という試練を経験したにもかかわらず、心の豊かさに重点を置く国民意識は、1980年に物の豊かさを明確に上回って以来、趨勢としてその差を拡大し、この十年、両者の割合は概ね60%対30%で心の豊かさ優位の状況が続いている。¹⁾

国民意識が「物の豊かさ」に力点を置く状況のもとでは、社会的合意も比較的得やすい。というのも国民は経済成長による生活水準の上昇をもたらす事案であれば、反対意見があってもそれを押さえ込むだけの

世論の力があるからである。その象徴的な現れが「中流階級」志向であった。しかし、「心の豊かさ」に生活の力点がシフトすると状況は複雑になる。何をもって「心の豊かさ」とみなすかは人それぞれだからである。1980年代に入って以降、中流意識に代わって価値観の多様化、生活様式の個性化が高まったことにそれが現れている。「心の豊かさ」が主要な国民意識になると合意形成のあり方も単純ではなくなる。多様化・個性化に対応した合意形成が求められる。

私は、1980年を境にして、日本国民の動機変容が起きたと考える。物の豊かさを求める欠乏動機から生きる意味を求める差異動機への転換である。なぜ1980年なのかについての検証は、他の著作でおこなったので割愛するが、マスコミやジャーナリズムで大衆化・中流化に代わって多様化・個性化が叫ばれるようになった転換点がこの年であった。²⁾

差異動機とは個性的な違いを創造したり

表現したりする動機のことである。欠乏動機は物質的に豊かな社会を求めて、効率と合理性を重視する機能優先社会に典型的な動機であるのに対し、差異動機は違いを創ることへの参加と意味充実が焦点となるポスト物質社会に典型的な動機である。自己実現、生きがいなど人生に付加価値を求める志向がその例である。これらは、機能効率よりも意味充実の問題に関わる。

差異動機の高まりは人々が他者との違い（差異）に敏感になりだしたことを表す。差異に敏感になるとは、個性的な意味を追求すること、他人とは違った自己を実現しようとすることである。また、意味を追求し充実させる主要な行為は自己を表現することである。目標は達成するというが、意味は達成するとはいわない。意味は表現したり充実させたりすることが中心である。

意味充実を生活様式とする社会では、違いに敏感で感受性を持ち、相違への権利を認め、違いに耐える精神構造が要求される。1970年代までは、違いに敏感であっても、大勢に順応しようとする横並びの圧力が社会にあった。突出した違いを削り落とし、標準化して合意形成をするのが近代の課題であった。標準化こそが、社会の合理化過程としての近代の本質だからである。けれども、これからの社会では、違いを認めあ

うことが社会運営にとって重要になる。そこでは、固有の違いをつぶして、平板化し標準化することの価値は薄らぐ。

以上のような兆候は、人同士のつながりと交流を電子化したSNS（ソーシャル・ネットワーク・サービス）の人気の高まりに現れている。FacebookやLinkedInが代表的である。これらは友達や知人同士の密度の高いコミュニケーションを促進する方法や場の提供、友達の友達というつながり機能により人間関係を拡張する機能を有する。自分のプロフィールや写真、日記、覚え書き、意見の表明等を友達や会員に公開したり、非会員にも向けて一般公開したりする機能も有しており、便利なコミュニケーション支援サービスとして人気を博している。まさに差異動機を満たすツールとして最適である。

◆
社会統合から社会編集へ

差異動機が支配的な社会では、これまでのような合意形成による社会統合は、その重要性を低下させる。従来の合意形成はしばしば、個性的な意見の相違を犠牲にして、最大公約数としての共通項をまとめることであった。これからは、可能なかぎり

個性的な違いを認めたくえて、それらを編集してまとまりを形成していくことが要求される。つまり、何か中心的な統一原理によって統合するのではなく、それぞれの自律性や個性を認めながら、まとまりを形成することである。また、編集は編集者によってまとめ方が異なる。ある編集では落ちた意見やアイデアも、別の編集では生きたり、新たな形に生まれ変わったりする。これからは、こうした編集が重なりあって、多重的な社会になっていく。差異を創ることへの参加を促進し、自分なりのリアリティを編集する社会への移行である。

編集とはほんらい諸種の材料を集めて、書物や雑誌の形にまとめることをあらわす。けれども、編集をそうした狭い概念に限定せず、文化や文明の形にまとめたり、人々の合意形成をおこなうことまで含む、広い概念として用いることが可能である。つまり、編集とは素材や情報を組みあわせ、ある独自の意味を持った世界（合意空間を含む）を形成する試みとして位置づけうる。

編集の多くは、これまでにない独創的な考えを生み出す作業というよりも、既にある素材を用いて独自性を持った意味空間を編みだす作業である。この編みだす工夫に創造性がある。情報が大量に飛び交う社会では、創造性や想像力は多分に編集的にな

らざるをえない。たとえば、脚本家次第で、演劇は原作小説を上回る現実味を獲得する。同じニュースの素材でも、編集次第で、伝達されるニュースの現実味が大きく異なる。

身近な生活においても、編集はいたるところにある。たとえば、われわれは朝起きてから夜寝るまで、一日のうちにさまざまな体験をする。朝食を取りながら新聞のニュースに目を通し、通勤電車で揺られ、職場で仲間と仕事の打ちあわせや会話をし、家に帰って家族と団らんする。一日に体験する出来事、情報の入手、刺戟はおびただしい。ところが、昨日の体験を思いだすのに、同じ24時間を必要としない。せいぜい、5分から10分もあれば思いだせる。それは、体験や情報が取捨選択され、圧縮され、意味としてストックされているからである。頭のなかで、経験そのものが意味として編集されている。

また、オーケストラの指揮者の役割も編集である。ベルリンフィルくらいになると、各楽器の奏者は個性ある音を奏でる。しかし各々が勝手に演奏したのでは、まとまりがなく全体としてはノイズになりかねない。そこで指揮者は各奏者の個性ある音を引き立てるために、それらを編集してオーケストラ独自の音を創る。同じベルリンフィルでも、カラヤンが指揮するのと、それ以外

の人が指揮するのでは音が違って来る。編集の仕方が異なるので、音のリアリティも違って来る。

さらに、和魂洋才という言葉がある。明治以降に和魂漢才をもじってできた造語で、日本文化の固有性、精神性を崩さずに、西洋の学問・知識を導入する姿勢のこと表す。この和魂洋才、和魂漢才の言葉が象徴するように、日本は異文化吸収能力を発揮してきた歴史がある。和魂洋才を、マイナスイメージとしての和洋折衷ととらえ、文化の墮落であると揶揄されることがある。しかし、「折衷は異質なものの共生を図る初めの一歩である」と評価すべきである。日本の異文化・文明導入は社会編集という行為に当たる。ものまね文化と自らも卑下しがちな日本の和魂洋才という伝統的才能には、異なる文化・文明を融合し、第3の意味空間（文化）を創造する独創的才能の発揮がある。



合意形成に求められる社会編集

社会編集は合意形成にとって不可欠である。私は以前、合意形成に関する考察をおこなった論文で、社会編集としての合意形成を次のように定義した。すなわち、「相互

に脈絡を欠いてバラバラになっている意見にまとまりをつけ、互いに関係づけることで、それらに調和をもたらすことが社会編集としての合意形成にほかならない」と。³⁾

以下、この定義にあてはまる事例を検討し、社会編集のさらなる意義を考察しておきたい。

1980年代半ばにデンマークで生まれた「コンセンサス会議」という討議民主主義の手法がある。これは遺伝子組み換え作物や臓器移植など主に科学技術分野の課題に関して、一般市民から選ばれた市民パネルと専門家とのあいだで討議しながら、4日間かけて討議しあう。そして社会的争点となっている問題について、市民パネルのあいだで合意を形成しそれを提案書としてまとめ、社会に発信したり、議員や政策担当者に提言したりする。この手法の特徴は合意を生み出す作業を専門家間の議論に委ねるのではなく、一般市民としたところにある。従来は、科学技術に関連する公共的な政策決定は専門家集団に委ねられ、一般市民が参加することはほとんどなかった。こうした状況を改善するために考え出されたのがコンセンサス会議である。

この会議では懸案となっている社会的争点について、専門家の説明を十分に聴取しつつ、15名ほどからなる市民パネルが討議

して合意形成を図る。同種の討議民主主義の手法として、討論型世論調査、市民討議会などがある。これらはミニパブリックスによる合意形成をねらいとしたものである。ミニパブリックスでの合意形成がそのまま社会的合意につながるわけではないが、手間と暇と資金さえそろえば、無作為抽出法で国家規模の母集団から数多くのミニパブリックスを抽出し、国民的な合意形成とすることも理論的には可能である。また、争点も科学技術の問題に限定することなく、社会問題一般に拡張することが可能である。

問題は市民パネルがどのような手続きにより討議するかである。単に集まって話し合えば済むというわけではない。三上直之によれば、コンセンサス会議は以下のような設計のもとにおこなわれる。⁴⁾ 参加者は、会議の主役である15名程度の市民パネル（できるだけ母集団から無作為抽出した人を選ぶ）、議論に必要な情報を提供できるような専門家（数名から20人程度）、会議の進行役であるファシリテーター（市民パネルの議論が円滑に進行するよう支援する）、運営スタッフ（独立した立場で会議の企画運営を進める）である。そして会議のスケジュールは、2度の週末準備会合、本会議4日間を標準とする。

市民パネルが、合意形成に至った提案書

を作成するうえで重要なことは、市民パネルが特定の専門家や利害関係者のバイアスを受けないようにすることであり、その役割を担うのがファシリテーターと運営スタッフである。とりわけファシリテーターの働きが合意形成の成否を握る。ファシリテーターは、市民パネルが懸案の社会的争点について「鍵となる質問」をまとめ、専門家との対話をおこない、討議によって市民提案書を作成するという全過程に関わり、その作業を支援する。市民パネルが、争点について十分な知識を得たり、声の大きい人の議論が討議を支配しないようにしたりして、合意提案書が作成できるよう支援する。

三上によれば、ファシリテーターは「議論や作業の進展のために、かなり介入的なファシリテーションを求められる場面もあるだけに、その活動が、恣意的、誘導的なものでないことが厳しく求められる」としている。⁵⁾ その他、コンセンサス会議にはさまざまな問題点が指摘されている。特に、費用と日程の問題がある。忙しい毎日を送っていると感じる人が、このような討議に参加できるのか。職場の休暇をどう工夫するのか、等々である。

以上のような問題点はあるが、コンセンサス会議は市民参加による民意（合意）の形成を図るうえで、重要な方法である。コ

ンセンサス会議では、時間の制約から意見の一致を見ない場合が少なくない。限られた時間のなかで議論したことを提案書としてまとめる作業には困難がともなう。こうした困難を回避するには、ファシリテーターの役割を強化する必要がある。市民パネルの議論に介入して意見の相違や対立を同期可能な意味空間にまとめあげる役割を果たせるようにすることである。すなわち、議論の整理、発言の圧縮、取捨選択と切り貼り、諸意見の関係づけなどをおこなう権限を与えることである。行き過ぎがあれば運営委員会がチェックする。

ファシリテーターという言葉には介添え役（世話役）という手垢が付いているので、ソーシャルエディター（社会編集者）と新たに命名するのが望ましい。ソーシャル・エディターとは、さまざまな意見を持った人々の討議過程に介入して、各人の意見の個性と多様性を活かしつつ、これらを編集して相互理解が可能な意味空間を生成させることである。

こうしたコンセンサス会議を、日本全国の各地域ブロック（北海道、東北、関東、……、九州、沖縄の10ブロック）で実施し、その取りまとめをおこなったソーシャル・エディターが今度は地域ブロックを代表する市民パネルとして、ふたたびコンセンサス

会議を開催し、日本社会全体の合意形成を多段階プロセスとして進めていくことが考えられる。そうすることで市民参加の合意形成が可能となる。議会政治に市民社会の力を注入することにより、民主主義を一歩前に進めることができる。

以上の手続きは、手間暇のかかる作業であるが、民主主義というのは手間暇がかかるのを通例とする。合意形成に際し、便益提供や権力作用を手段として使用することは効率的に思えるかもしれないが、討議や対話を通じた相互理解と共生可能な意味空間を編集できて初めて、民主主義の要件が満たされよう。

最後に、社会編集に際して参加者が備えておくべき5つの条件を掲げておこう。第1は、社会統合のノスタルジーと決別し、互いに了解可能な新たな意味づくりに努めること。第2は、異質さへの感受性を高めること。違って当たり前。違ってすることに耐える精神構造を涵養すること。第3は、目的・手段化した成果志向的なコミュニケーションのあり方をとらえ直し、意志疎通を図る対話的コミュニケーションの素養を積むこと。第4は、異質なものの同期化を図ること。多様な意見のぶつかり合いから生じる不協和音を同期化して新たなハーモニー創造の道を求めること。そして第5

が、道具的理性に代えて対話的理性を涵養すること。つまり、討議への参加者が自己の主観的な考えを克服して、強制的にではなく、また便益主義的にでもなく共同主観性を確認する理性を育むこと。これら5つの条件は、人が簡単に修得できるものではない。便益や権力をあからさまに使用することなく合意形成を果たすには、おそらくこうした条件が整っていることが不可欠である。

- 1) 内閣府大臣官房政府広報室「国民生活に関する世論調査」(平成26年度)報告書の「これからは心の豊かさか、まだ物の豊かさか」の結果(<http://survey.gov-online.go.jp/h26/h26-life/zh/z35.html>:図35、2015年8月14日検索)を参照。

- 2) 差異動機については、拙著『社会階層と政治』東京大学出版会、1989:186-190頁、および拙著『混沌の力』講談社、1994:130-133頁を参照。
- 3) 拙論「社会理論における合意形成の位置づけ—社会統合から社会編集へ」猪原健弘編『合意形成学』勁草書房、2011:17-35頁。
- 4) 三上直之「コンセンサス会議—市民による科学技術のコントロール」篠原一編『討議デモクラシーの挑戦—ミニ・パブリックスが拓く新しい政治』岩波書店、2012:33-60頁。なお、コンセンサス会議を日本に初めて紹介したのは、若松征男(「デンマークのコンセンサス会議—科学と社会をどうつなぐか」科学技術コミュニケーション、1993、2巻2号:22-24頁)である。また、コンセンサス会議の日本における第一人者として、小林傳司(『誰が科学技術について考えるのか—コンセンサス会議という実験』名古屋大学出版会、2004)がいる。
- 5) 三上直之、同上論文、53頁。

プロフィール.....

いまだ・たかとし 1948年神戸市生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程中退。1975年東京大学助手、1979年東京工業大学助教授を経て1988～2014年同大学教授。学術博士。専攻は社会システム論、社会階層論、文明論。主著に、『自己組織性—社会理論の復活』(創文社、1986年)、『社会階層と政治』(東京大学出版会、1989年)、『意味の文明学序説—その先の近代』(東京大学出版会、2001年)、Self-Organization and Society (Springer、2008) など。